

## 〈能力をめぐる正義〉に関する社会哲学的探究

——「能力主義」批判と個人の固有性——

西 口 正 文\*

A Socio-philosophical Quest for *Justice over Ability*  
—Critique of Meritocracy and the Property of the Individual—

Masafumi NISHIGUCHI

### 《はじめに》

本稿での論考の下敷きをなす問題感覚、そしてその問題感覚に発して考え進めようとする方向だけを、ここでは述べておこう。

もっとも素朴なかたちを採って言うとするれば、「能力主義」（もしくは“メリットクラシー”あるいはまた“フェアな競争に基づく実力主義”）が果たして正義たりうるのか、という問題感覚が下敷きとなる。そもそもひとつには、各人の所有のあり方——所有についての規範的あり方——を軸にして、その面から社会構成原理を問おうとするところ、そこにおいて「能力主義」が競り上がってきたのだ、というようにひとまず捉えておけるはずだ。またひとつには、なんらかの（しばしば特定されてある）成果をあげる行為を——機能の達成を——なしうる個体とそうでない個体に分け隔て、さらには個体ごとに達成できる段階をもっと細分化してランクづけて、それぞれの個体の存在価値を序列化してよいとする・序列化すべきだとする——社会現象により引き付けて言えば、それぞれの個体の値踏みとしての地位や威信を格差づけてよいとする・格差づけるべきだとする——、そういう原理として「能力主義」が持ち上げられてきたのだ、というようにも捉えておけるはずだ。このように捉えられる能力主義の原理は強く深く社会秩序に根づいているのであって、それを批判することには甚大なる困難が伴う。そのことを第1章で示そうとする。ところが、さきほど記した問題感覚に発して「能力主義」原理の成り立ちを分析的に検討しその妥当根拠を問うという（けっして数多いとは言えない）先行研究から汲み取りうることを汲み取った上で考えてみて見出せるのは、社会構成原理としてこの原理が支配力を揮うことの妥当性への懐疑がますます強まること、そして懐疑が強まるに留まるのではなく「能力主義」には妥当根拠がないのであり正当化されえないこと、このことである。そのことについて幾分か立ち入った考察を、より正確にはかつて考えたことに幾分か補った再

---

\* 人間関係学部 人間関係学科

論を、本稿の第2章で展開しようとする。

いましがた述べたようにこの原理への懐疑が強まるとはいえ、まず、所有についての規範的あり方としてのこの原理の妥当性にかかわっては、業績や“貢献度合”に応じた報酬が得られなければひとは（個体は）努力する意思を減衰させ社会全体としての生産性も低下することになるから、「能力主義」を捨て去ることはできない、といういわば通用的思念との衝突が起こることに気づかされる。この衝突局面に視軸を向けるならば、上記の判断見通しを推し進めるにあたっての容易ならざる壁にぶつかっているように思われる。次いで、個体の存在価値の格差づけを正当化するものとして現われるこの原理の妥当性にかかわっては、より複雑で困難で高度な専門性を要する仕事を遂行できるようになるための修練へとそれへの候補者・適格者たちを向かわせる誘因が不可欠であるから、という理由でもって、「能力主義」を捨て去るわけにはいかない、と逆襲されることも起こってくる。

業績や“貢献度合”に応じた・正の相関を帯びた報酬が得られなければ、働こうとしない行為者が多数出てくるはずだ、という見做し。また、いま述べたようなかたちでの報酬が得られなければ、働こうとしない行為者が相対的に多数を占めるに到るがゆえに社会全体としての生産性が低下して困ようになるはずだ、という懸念。さらには、高度な専門的力量を要する仕事の遂行者を養成するための仕掛け、そして専門的力量のさらなる発展・高度化へと促し駆動する仕掛け、これらを欠いては活力ある社会の再生産を見込めないとする懸念。こうしてあれこれと挙げられる懸念にどう対応すればよいのだろうか。というよりもむしろ、いかにして問いを立て直すことができるのだろうか。生産への誘引に纏わるこうした問題圏について、第3章で考察することにする。なるべく通用的想念に引き寄せたかたちをとって「生産への誘引に纏わるこうした問題圏」とひとまず表記したのだが、この問題圏の中身を掘り下げてみるならば、それぞれの行為の——現われとしてはそれぞれ特定の個体身体に結び付けて見て取られがちなそれぞれ特定の行為の——貢献度合の評価をめぐる、ひいてはそれぞれの個人に帰属させるべき責任ということをめぐる、考察されるべき問題圏なのだということがわかってくる。いまここで述べようとしていること自体についてこれまで考えられた形跡というのが、ほとんど見当たらず、むしろ曖昧にされてきたということが見出される。このように錯綜した問題圏についても、第3章で考察しようということになる。

特に第2章での考察を承けて、能力発揮の成果を分かちあうことの正当化ということ、および、個体存在の固有性ということ、これら二つの論点について考えることを通して、簡略ながらも「能力主義」に代わる人-間関係秩序のごく基本的でおおまかな輪郭を第3章第3節および第3章《補》で描くことにする。

## 第1章 「能力主義」はなぜ批判されがたいのか

### 第1節 ブルデュー派再生産論の引き取り方

人間の平等／不平等と能力の差異との関連を問おうとするとき、そこに教育という営みのもつ作用を介在させて問い直されることがこれまでもなされてきた。その例としてかなり広く知られているものに、ピエール・ブルデューを中心とするひとたちの研究がある。ブルデュー派再生産論と名づけてもよいであろうその研究の所産をここでいちいち紹

介する必要はないが、ただここでは、その研究のひとつの側面においては「経済資本」と識別された「文化資本」なる概念を用いて、それら双方の所有の仕方が諸階級や階級内諸集団それぞれにおいて異なること、そうしてそれらの所有の豊かさ度合がこどもの生育環境の恵まれ度合として強い影響力を発揮すること、しかも特に文化資本の所有にアクセントを付された生育環境の恵まれ度合が教育達成の度合にも強く相関性を持つこと、こうしたことが実証的な調査研究によって明らかにされたのを確認しておいてもよいだろう。ブルデュー派再生産論のこの側面をもっぱら重視しつつ、この国でも荻谷剛彦は実証的な調査研究を踏まえて、とりわけ家庭でのこどもの生育環境の恵まれ度合の違いがこどもそれぞれの（学習に取り組もうとする意欲の相違も含めて）教育達成の違いと対応していることを、さらには（生育環境の恵まれ度合が示す）階層の違いによるその格差が拡大していることを、近年のこの国の教育改革路線を批判する文脈を伴わせて、強調してきた。荻谷の論立てにおいては、社会階層もしくは社会階級として現われる全体社会の不平等構造の存在自体に向けての問題化は基本的には無いのであって、要するに、教育を受ける機会を実質的により平等化することをめざそうとするものであり、言い換えれば、よりフェアな競争に基づく「能力主義」や「実力主義」をめざそうとするものである<sup>1)</sup>。

ブルデュー（たち）の実証的な調査研究に視野を限定してしまうならば、上記のような引き取り方もなされうだろう。とはいえ、ブルデューによる他の著作での議論の展開内容をも勘案するならば、不平等構造に組み立てられた既存の全体社会のありようへの根底的な問題化がなされ社会変革を志向するという構えが採られている、とみてとることができるだろう<sup>2)</sup>。その点にここで深入りする必要は無い。ただ、さきほど触れた荻谷の論立ては、不平等な社会世界の存立構造を問題化せずに済まし、能力の差異の生じる機制についての一面を問うに終わっているのであるから、人-間の不平等と能力の差異との関連をめぐる問題設定のあり方としては表層の、というよりもむしろトリヴィアルな、と見たほうが適切な中身でしかなかったのだ、と言っておいてよいだろう。こうした論脈を「能力主義」へのまなざしという角度から捉え直す時に、言えるのはこうだ。すなわち、個体身体にとって親などからいわば外的に賦与された発達条件・教育環境の良さによって恩恵を受けること、これに限っては不合理を認めるわけであるから、賦与される発達条件・教育環境を平等に揃えた上でそれぞれの個体身体がより豊富に／より乏しく産み出した成果をそのままそれぞれの個体が得ること、それは当の個体が自ら公正に産み出したものの獲得ゆえに、正当とみなす。これはすなわち、「能力主義」原理を信奉する者としてのまなざしにほかならない。

## 第2節 生育環境の平等化による「能力主義」からの脱却（？）

人-間の不平等と能力の差異との関連をめぐる問題設定のあり方として（荻谷と比べて見るならば）もっと本格的に問おうとした痕跡を、われわれは堀尾輝久に見ることができる（堀尾1963）。堀尾による立論の方向性は明瞭である。すなわち、人-間に不平等をもたらす現代社会の存立構造を正当化する論拠になっているのがまさに「能力主義」原理なのだと捉えた上で、能力の優劣格差を生み出す要因を把握しその要因を取り除こうとする。このような方向性をもった立論である。能力の相違について一応は「自然的差異」と「社会的差異」に分けてみるものの、より本質的には社会経済的不平等構造が能力格差

を生み出す要因だと、この立論では押えられていた。したがって、社会経済的不平等構造を打破し消去してゆけば能力の優劣格差が縮小すること、それとともに、それまでの社会経済的不平等構造の中で抑制されていた生産力と富の増大が飛躍的にもたらされ、そのことが真に豊かな教育機会提供を可能としどのこどもにも高い段階への能力発達を見込めるように（実現できるように）なる。こどもたちの生育環境を良くし教育の機会を高い水準で平等化することが、こどもたちの間の能力格差を縮小して高度な能力発達を達成できるのだ、という展望である。能力の優劣格差をできる限りなくしてゆくべきだとする主張が、既存社会の不平等構造を打破することの必要性と密接にかかわらせて述べられていることに、荻谷との対質という観点からあらためて注意を向けておこう。

こうしてみてきた荻谷と堀尾の立論には、しかしながら、こどもそれぞれの個体にとって制御できないような能力の優劣格差は本来現われてはいけないものだと捉えたうえで、その優劣格差をなくすことをめざすという方向性を共通して有しているのを知ることができる。そしてそのとき、それぞれの個体にとって制御できないような能力の優劣格差がなぜ生み出されるのかについての問題化はけっして深められているとは言えないのである。つまり、能力の差異をもたらす条件への視線に看過すべきでない曇りが生じていたこと、このことをここで指摘できるだろう。そのことは端的には、もっぱら能力発達を促すための環境整備——こども・青年にとっての生育環境の教育的・文化的側面の平等化を図り、さらに、おとなも含めたひとびとにとっての社会経済的生活環境の平等化を図る、という環境整備——への注目を前面に押し出す、という立論構造が主流をなしてきたところから、出来たと見ることができよう。堀尾においても、個体身体に帰責できない能力差規定要因を掘り下げて問題化するには到っていないのである。

荻谷はもちろんのこと、堀尾にあっても未だ、ひとそれぞれその個体ごとに発揮する能力の差異や行動特性の差異に、それも生育環境の不平等というところに還元して説明しきれないような差異に、感受性をはたらかせることをもその重要な契機として組み込んで、能力主義を問題化するという論題に、さらに言えば能力主義が引き起こしているかもしれない〈人間の尊厳とその侵犯〉という論題に、まともに取り組みれてきたとは言いがたいのではないか。

## 第2章 「能力主義」が正当化されえないこと・再論——生きることのよさに纏わる能力の問題化

### 第1節 “受苦的”存在側面から見た不運と不正——人間不平等の発生を思考するための場として

人-人間関係を規範的に仕切っていくとする際に、その前提とすべき認識として、ひとびとの生きる環境には資源の稀少性および個人間の利害の対立があることをふまえないといけないということが、しばしば強調されてきた。この前提的認識から出発して社会世界の秩序形成をめぐるなされる議論においては、稀少な資源をいかに配分すべきか、というところに論題の焦点の一つが合わされることになるだろう。こうした議論の進め方に対してはさまざまな角度から反論することもできるであろうし、とりわけ、いま述べた前提的認識が社会秩序の形成を論じるにあたって疑うことのできない立脚点とされてよいの

かどうかは、それほど簡単には判断できないことである。とはいえ、重要視した方がよい認識だと思われる。なぜならば、次のような論脈を辿って考えた場合にも、その認識は欠かすことのできない大切な意味をもってくることになるからだ。

そのそれぞれにおいて感性を帯びる身体、その身体を切り離して生きるわけにはいかないひとという存在には、つぎつぎに生み出され増殖しがちでもある諸々の欲望が随伴する。それら諸欲望のそれぞれが各人の生において次々に充足されてある、という様態は、想定しがたい。恒常的に充溢せる様態の生というのは——そのような生の安定態は——、たとえば、ルードヴィヒ・フォイエルバッハ流の（唯物論的）人間学的視座（フォイエルバッハ 1841→1937）からアプローチするような場合にも、またたとえば、社会生物学的視座からアプローチするような場合にも、浮かび上がってくるであろうひとの生存のあり方からして、達成しがたいものと観るのが妥当であるのだろう。

いま述べた生存のあり方を踏まえるならば、問われるべき重要な論点が浮上してくる。自己に向けても他己に向けても、ひとそれぞれの存在を尊厳なる存在として感得するに足るための欲望充足条件が——尊厳なる存在たりうるための手段としてのそれが——備給されるかどうか、という論点だ。現状においてはありがたいことなのだろうけれども、基本的な生活手段（財）と自尊感情保持手段という（欲望充足のための）条件は、まず何よりも備給されてよいのではないか。この世の規範のありようを観るならば、そのように備給されるのではなくて、できる者が——より価値あるものをより多くより速く生産できる者が——より豊富な欲望充足のための条件を手に入れることができるようになっている。できるかできないかに応じて、できるにしてもその度合に応じて、欲望充足のための条件を手に入れることができる。そのうえさらに、そのことが正しいことなのだと、伝統的には“配分的正義”という観念を以って、みなされてきた。そこにおいては、とりわけできない度合が甚だしい場合、自尊感情を保持することが困難になりがちで、他者の視線のありようにとっても尊厳なる存在としての看取りや感じ取りが困難になりがちなひとの存在は、要するに「不運」として、それ以上の問題化へとは向き進められることなく、結局諦めて受け容れるほかないことであるように、処理されることになる。

翻って、ここに謂うところの「不運」は、さらに掘り下げて問題化されてよいはずではないか。その問題化がなされることになれば、伝統的な“配分的正義”という観念が揺さぶられるに到り、延いてはこの観念に拠って立つことが不正ではないかという嫌疑をかけられてよいのではないだろうか。

## 第2節 モダニティの内側におけるひとという存在へのまなざしと値踏み

「すべての市民は、この法律の目から見ると平等であるから、各々の能力にしたがって、徳と才能における差異以外のなんらの差別もなく、あらゆる高位、地位、公職に就くことが等しく許される」（古茂田宏訳）。これは、フランス革命時に発表され公文書として受け容れられ定着することになった「人間および市民の諸権利宣言」第6条後半部である。能力に基づく差別がなされて当然だとみなされているのを——能力主義が当然視されているのを——、あらためて確認しておこう。この宣言を明確な出発点としてそれ以降、能力主義は近現代社会における憲法や人権宣言の類において明言されつづけ、社会構成原理の基軸に位置づく意味秩序として強化されてきた。万人の自由・平等を獲得する方向に向けて



宣言されたと称揚されることの多い近代人権思想。その思想的祖と見做しうるジョン・ロック、さらにはその思想的発展相の一つと見做しうるところの、ジョン・スチュアート・ミルによる提唱を検討することを通して、ジュディス・シュクラーは近代人権思想の地盤をなす双対として「自然権の自由主義」・「人格的發展（発達）の自由主義」を挙げている（シュクラー 2001）。「自然権の自由主義」および「人格的發展（発達）の自由主義」とは、各人の身体に誕生時から・元来具わる能力が平等であるかのように見做し済まし、そうした各人の能力を最大限に発達させることが、また発達を遂げた状態が、望ましいことである、とする思想だ。シュクラーの指摘は的確だと判断できる。

この思想圏からはひとの尊厳という事柄に向けて、どのような視線が生じることになるか。すぐさま気づかれるように、ひとそれぞれの存在をそのまま無条件に尊厳なる存在として捉えるわけにはいかない。端的に言えば、能力主義秩序のもとでの優者にこそ尊厳のまなざしが向けられ、逆に劣者に向けては尊厳なる存在様態にそぐわぬ負性を刻印するという視線が生じるだろう。

このことと関連づけて教育という営みを把握することができる。すなわち、各人の能力を最大限発達させるという建て前のもとに、優者と劣者を——尊厳なる存在様態に値するものと値しないものとを——分類しその度合に応じて序列化する、そのような営みであると把握できる。宗像誠也が強調していた“人間の尊厳の確立としての教育”という言い回しも、いましがた述べた脈絡においてよく理解できるのではないだろうか<sup>3)</sup>。

### 第3節 個体的身体に付着する能力（器官）と〈能力の私的所有〉との峻別

前章で論及したところからわかることのひとつは、社会的不平等に対する問題意識を持ちつつ教育と社会の関係のあり方を解明しようとした研究としてわれわれが参照しうる研究の到達水準から考えて、〈人-間の差異ある能力と平等なる存在〉ということをめぐる議論が混乱状況に置かれたままだということだ。この混乱状況を打開するためのひとつの試みとして、ここでは〈能力の個体的付着〉と〈能力の私的所有〉という（対照をなすかたちで識別されるべき）概念を導入しておこう。なお、この点については既に拙稿（西口 2006：114）で挙示したのであるが、それに部分的修正を加えて再記する。

活動の能力が優れていたり劣っていたりしているという現われの単位は、あるいはほとんど同じことだが、そのはたらきの所産として優れた業績をあげたり逆に業績をあげられなかったりするという身体器官の性能の違いが現われる単位は、ひとりひとりのひとなのであり、それゆえに、優劣度合において見られるところの能力が外見上、直接に結び付けられがちになるのは、ひとりひとりのひと——個体——である。そのことはまた、優れた能力を発揮できるか、それとも劣った能力しか示せないか、その相違をもたらすのは結局、個体に帰責されるべき事柄だ、とみなされがちになる、ということでもある。

しかしながら、上記のような外見上の結び付きに囚われた了解の仕方に留まることなく、現われにおける能力の個体身体への帰属と能力の形成される条件とを掘り下げて考えることが大切になるだろう。

この論稿においては、現われにおける能力の個体身体への帰属という事態を、〈能力の個体的付着〉と呼ぶことにする。他方では、優劣度合という点から見てさまざまに相違する能力の発揮のありようを、現われにおいてその能力が個体身体に帰属するからといって

そのまま当の個体に帰責されるべき事柄だとみなす、という事態を、〈能力の私的所有〉と呼ぶことにする。この後者の事態においては、個体の発揮する能力の度合に応じてそれぞれの個体の社会的処遇が規定される（たとえば限られた資源をそれぞれの個体へと分配する際の分配量の決め方が定められる）。つまり、できるかできないかと直接対応させて受け取りを決めるという所定の規範に、懷疑なく従属するかたちで、もっぱら個体間関係の相剋性に依拠して能力評価-処遇のあり方が定められることになる。ということは、〈能力の私的所有〉原則のもとでは当の個体にとっての利己的排他的利得獲得・拡大が最上位に位置づく目標となり、その目標実現のためには他者（たち）の幸いや利得は無視して、あるいはそれらを挫き退けてでも、当の個体身体に現われにおいては帰属する能力を専有して使用し処分することができる、という発想スタンスが採られることになるだろう。能力の私的所有の本質をなすこの発想スタンスにおいては、上記のように能力の利己的排他的な専有と使用と処分こそが直接に志向され優先されることになるわけだから、現与の社会システム内における評価のありようでは重要視される能力が何故に重要視されねばならないのか、その理を問い直すという構えの生じる余地はほとんどない。現与の社会システム構成論理を懷疑なき前提とした上で、私的に専有せる能力による利得の獲得と拡大に意識が向けられるのだ。

#### 第4節 能力主義の対象化から得られた解

##### (一) “できること-もつこと”における望ましさの先与性そして物象性

能力主義に飲み込まれてしまうことなく距離を取ってそれを対象化するという、これまでいくらか手がけてきた作業を経て、わかってきたことを——解を——ここでのおおづかみに示しておくことにする。

わかってきたことのひとつは、ひとが現に生きる社会においてどのような活動性およびそれに見合う能力が価値あるもの・発揮されるのが望ましいものと評価されるのかは、ひとそれぞれの生にとってみれば、既に先に与えられており、しかもその価値や望ましさが制度化されてあるがゆえに物象性を帯びている、ということ。力点を少しずらして言い換えるならば、各人の発揮する活動性や能力は現与の社会とは別様の社会編制のもとでならば別様に評価されることになること。そうした事情に考慮を払うことなく、現与の社会における価値基準・望ましさ基準<sup>4)</sup>を絶対視してその中にひとそれぞれの生を従属させるのを当然視するとすれば、そのことの保守性が厳しく批判されてしかるべきだろう。

人がよき生を探り出し築いてゆくにあたってその資源となるものについて、それを生産できることとそれをもつこと（＝自らの所有物とすること）を結び付けてしまう、という私的所有なる原理——次の(二)における説明によって、これが歴史貫通的で普遍的な妥当性を有する原理だと見るわけにはいかないことが明らかになるのだが——もまた、ここで述べた解のあり方からは、厳しく批判されることになる。

##### (二) できることと個体身体との接合の偶有性

能力主義の対象化からわかってきたことのもうひとつを、ひとの生にとって有用な資源を生産できる能力とひとそれぞれの身体との関係に焦点を合わせ、〈能力の私的所有〉が妥当性を有するののか否かにこだわることを通して、示しておこう。

生産できる能力はその現われにおいては確かに個体身体に結び付いているのだけれど

も、その身体・器官および能力を当の個体自身が独力で生み出したのか、と問うならば、否と答えるほかない。つまり、できること《その能力》の生み出される条件および個体身体・器官の形成条件に視軸を向けることによって、生産できること（能力をもつこと）と個体身体とを接合させるのを当然視する見方は、その根拠を失う。ところが現与の社会において能力の私的所有原理にしたがって生産できることと個体身体とが接合されているとすれば、さらには生産できる能力に応じて所有できる資源の多寡が決められるとすれば、それは偶然にそういう社会に（社会風潮の中で）生きることになったからにすぎない。すなわち、その接合は偶有性を帯びているのだ。

### （三）だから能力主義は正義に悖る

上述の(一)・(二)の内容を踏まえれば、能力主義を正当化しようとするのが悖理である、と結論づけられる。端的には、できない者はもつことができず、ゆえに生存もできない、という意味秩序を押し通そうとする——社会政策の現相においてはもちろん、露骨に“弱者”排除を貫徹するわけではなくてさまざまな糊塗策が講じられ、“弱者”側からの怒りの強まりをはぐらかすのであるが、意味秩序としてはこのように捉えてまちがいない——のがまさに能力主義なのだから、それは正義に悖るのだ。

## 第5節 【正義か？】という問いの立て方へのこだわり

### （一）わたしたちの経験可能領域を統べる秩序を懐疑すること

任意の社会システムを対象視するとき、そこには規範的にもしくは技術的に可能なものとみなされている行為と体験の集合を識別することができるはずである。こうした行為と体験の集合を指して、大澤真幸に倣いつつ、その社会システムにとっての「経験可能領域」と呼ぼう（たとえば大澤2002：103）。わたしたちの据え置かれているこの社会システムでの経験可能領域に、というよりもむしろ、経験可能領域を規定する原理として、能力主義はかなり強固に位置づいている。中心部に位置づいているといっても過言ではないだろう。

この能力主義は——より正確には〈能力の私的所有〉原理は——、行為や体験としての意味づけをめぐるそれまで未整序であったり曖昧なままにされたりしていた部面にまで能力という力の支配についての妥当／非妥当の規範的識別を押し及ぼそうとする。そのような性向（傾動）を持った原理だ。なお、ここに謂うところの「能力」とは、その望ましき基準や尺度について既にシステム内属的に意味規定され方向づけられてあるものなのだ、ということをおぼろげに想起しておこう。この原理の下で行為者はその個体身体に付着した能力を手段としてそれぞれ自らの利得獲得を最大化すべく、既に手に入れた経験可能領域をより包括化し普遍化するように競い合うことになる。こうした脈絡に照らせば、狭く経済システムのみにおいて想定されがちであった資本主義を、いっそう拡張してその本質をつかもうとする際の把握の仕方——「資本主義とは、——ちょうど企業が技術革新をめぐる競争しているように——より包括的で普遍化した経験可能領域を獲得するべく諸個人が競争している社会システムなのである」（大澤2002：104）——に、能力主義は頗る親和する。

### （二）“自己責任”プラス“運”として受容せしめる、能力をめぐる経験可能性

既に第2節において言及したように、近現代社会における人権-法秩序は、またそれと



表裏一体をなす政治経済秩序は、「自然権の自由主義」および「人格的發展（発達）の自由主義」を地盤にして産出されたものだ。そうであってみれば、対等な条件下に誕生したはずの、しかもそれぞれ別個独立性をもっているはずの人格が、何よりもまず“自己責任”において行為し個人としてできる限り発達を遂げられるように努力することが要求される。そうして次に、“自己責任”をもつての行為へと制御することの可能域を越えたところでは、その結果を“運”として甘受することが要求される。近現代社会でのこうした人権秩序下の能力をめぐる経験可能性は、かくて能力主義を、それへの懐疑を封じ込むかたちで、包括的に・普遍化して展開するものとなる。

しかしながら、第4節で考察したところからわかるように、能力主義は正義に悖る。再度ここで強調したいのは、【正義か？】という問いの立て方が重要だということである。現与の社会に無批判な順応姿勢で終始するのでないことを欲するならば、社会批判へと向かい立つことの大切さを思うならば、そのときの根本論題は【正義か？】に収斂するであろう。

### 第3章 能力主義をいかにして脱却するか

#### 第1節 “生産への誘因としての業績報酬の必要性”というストーリー

《はじめに》の箇所では、「生産への誘因に纏わる問題圏」に言及した。業績や生産への貢献度合に応じた報酬が得られるように、そのように応報の指針による格差づけられた分配が（——生活手段となる資源の分配が）なされなければ、社会的再生産ができなくなりその社会は衰滅してしまう。だから、能力主義が保持されなければならない。このような主張がしばしばなされる。この主張にどのように応じるのか？ つまり、能力主義批判に反逆するという脈絡においてよく持ち出される主張に対して、どのように応じるのか、という問題圏のことだ。

ここにおいてもわれわれは考えるべき事柄をむやみに錯綜させぬように留意した方がよい。優れた業績や高い貢献度を生み出せること自体は否定されるべきことでない。人間たちがよく生きるのにそのことが役立つのであれば、そのかぎりでは。ここで大切なのは、優れた業績や高い貢献度という成果をもたらした能力を、その形成される経緯を遡及するかたちで見つめ直し省みてみるならば、当の個人に帰着するわけではなかったのだから、その成果を当の個人に直接結びつけて応報するという考え方が原理的レベルでまちがっていること、そのことに気づくはずだ。また他方では、個体身体に偶発的に付着したといえる部面が多量にある、そういうものとしての能力ではあるけれども、それを引き受けて生産活動をはじめ諸々の活動に取り組んで、その過程で感じ取ることも無いではないやりがいや達成感やあるいはおもしろみや魅力などは、そうした活動を織り成す人間の間柄が基盤をなしつつも、〈感じ取り〉としてはその個人が得ることだ。そうして得ることが無いわけではないが、生産活動への意欲や動機づけが無くなるはずがない。

このように考えることが筋道となる。それゆえに、この節のはじめに挙げて示した主張を斥けることができる。ここに謂うところの問題圏は、能力主義批判の論理をもって充分に解決できることであったわけだ。

## 第2節 能力発揮の成果を分かちあうことの正当化

前節での考察と不可分の関連を持たせつつ、この節では《基本的な生活手段および生活機能上の幅について各人への平等な分配が正当だ》……（＊）という結論を導く筋道を述べる。より正確に言うならば、既に示されている考究を紹介し確認する。その筋道は立岩真也（2004）に示されている。彼がつとに論じてきたことを確認するならば、まずなによりも、ひとそれぞれの存在の尊厳ということが平等に承認される、ということ。これはもはやその根拠づけを要しない始源をなすことだ。この承認の上で、それぞれの人がよき生を求めて行為すること・生活することの自由が平等に保障されてよいし保障されるべきことになる。そうであれば、よき生を求めてのそれぞれの生活の手段をなすものが平等に共有されるべきことになる。つまり、平等に尊厳なる存在たりうるための自由を支えるために必要なものと必要な機能は平等に享有されるべきだから、基本的な生活手段および生活機能上の幅について各人への平等な分配がなされるべきことになる。これは、始源をなす承認を受けいれるのであれば結論（＊）を導出するほかない、そこに反論の余地を入り込ませない筋道だと言えるであろう。

いしましたが、「各人への平等な分配がなされるべきことになる」と述べたのだが、それは一律に・画一的に物財をもしくは貨幣量を支給すればよしとすることではない。各人は、さまざまな種類や程度の障害をもっていたり、健康状態にも違いがあったり、生活環境上の相違があったり、それぞれの選好の違いがあったり、等等という違いに応じて生活の基本を支える分配を行なう、という趣旨である。それを実施し運営する段には、その実施基準や運営計画としてとても多くのことが考えられ工夫されねばならないだろう。多大の苦勞が伴うことが予想される。とはいえ、そういう予想を以って実施が無理であろうと判断するとすれば、それはまちがった判断である。

## 第3節 個人の個体存在としての固有性と尊厳なる存在としての平等性

【ひとそれぞれは尊厳なる存在として平等である。】……命題☆

命題☆を偽であるとして斥けることができるであろうか？ たえば誕生してきたばかりの人（新生児）のひとりひとりに向けて、その存在についての尊厳度合をランクづけて示すことがよいことかどうか？ そのようなランクづけが不快でおぞましいことだと判断するのに、困難を感じることはさしてないだろう。ひとそれぞれの存在の尊厳についての平等とは、ひとつにはこの局面で見て取られることだ。ひとそれぞれが試みたり成し遂げたりしてゆく行為のそれぞれのありようやその社会的機能としての貢献度合というところではない、それとは別次元の、いま言ったこの局面において見て取られることだ。

もう一つここで押さえておくべきことがある。それは、ひとそれぞれが生きて活動する中で積み重ねてゆく行為それぞれのありようやその社会的機能としての貢献度合によって存在の尊厳度合が上昇したり下降したりするのではない、ということだ。こうして見て取られるところの、ひとそれぞれの存在の尊厳についての平等、たしかに抽象性を強く帯びてはいるがわれわれにとって意識することのできなくはないこのことに関して、つとに竹内章郎が〔竹内1986〕、さらに立岩真也が〔立岩1994〕論及してきてもいる。ひとそれぞれの行為の優劣や社会的機能上の貢献度合の高低・多寡によってひとの存在価値の序列化を行なうこと——能力主義に依拠すること——、そのことの不当性をわれわれはすでに把

捉することができたのであるから、それを踏まえれば、いま述べたところの、押えておくべき第二の点は難なく受け容れられるであろう。

では、いま述べた論点、すなわち、行為の優劣や機能上の貢献度合の高低・多寡によって動揺させられぬはずの尊厳なる存在としてのひとの平等という論点、この論点を、能力の相違をひとつの・とても重要な焦点として含むところの、ひとそれぞれの違いと、どのように関係づけることができるのか？……問★ この点について考えるには、竹内章郎の議論（竹内1993：94-96）が手がかりになる。個体身体と能力との「外面的結合」を踏まえてそのうえに、その個人と能力との「内面的結合」に視軸を向けられるとし、この「外面的結合」と「内面的結合」をさらに緊密に繋ぎ合わせて、ひとそれぞれと能力との「媒介的結合」という様相を捉えることができる、とする竹内の筋立ては、ヘーゲル論理学の構制を取り込んでみてもいい。竹内の言うところは示唆に富むゆえに、その説明を基本的には受け容れたい。

ただ、彼の説明にはいくつか不備や曖昧な点、理解の混乱を招きやすい点が見られる<sup>5)</sup>。そこで、竹内説を重要な手がかりにして、問★に対する解を、本稿のここまでの論脈にそぐわしい形で示しておくことにしよう。ひとそれぞれの個体身体と能力との結びつきは偶有性を強く帯びているわけであったが、だからといって個体身体から能力を切り離すわけにもいかない。そこで、それぞれのひとは自らの個体身体から切り離せない能力を、むしろ能動的に引きうけたうえで、よき生の探り出しへとまさに特殊性をこそ帯びて向かい歩み出すこと。このとき明瞭に理解しておくべきなのが、優劣度合においてはさまざまな能力が付着し、その優劣度合についての個人責任が基本的には問われえない、ということだ。他者たちとの呼-応の関係の中で、尊厳なる存在として平等たりうるための手段を分かちあうことを必要条件として、特殊によき生を求めてゆくこと。この境位において、個人の個体存在としての固有性が感得されるであろう。

### 《補》よき生を求めての呼-応の中で個人責任は問われ続ける……個人責任をめぐる疑念に向けて

環境にも遺伝にもそのアンサンブルにも還元できない努力と精進はあるのだろうか？ 本稿のここまでの行論ではこの点が曖昧なままに残されている。この点についての本格的な考察は他日を期したい。ただ少しだけ言及しておこう。

悩ましいこの問いかけに対する答えを探るにあたっては、われわれの経験的に知覚できる相互行為の過程をつぶさに省みることから、始めることで、手がかりを得られそうに思われる。基本的には、呼びかけ-応じる相互行為という関係の中でその関係を反省的に振り返り振り返り直すうちに、正負の意味を帯びた個体責任が暫定的にはあれ感得されることになる。そうした感得の累積を通じて、敬意を払われたりそうでなく否定的に判断されたりする。ここに言う感得や判断は、硬直化を拒むところの、そのつど省察され直す性格のものとなるだろう（ならねばならぬだろう）。

能力主義を強固に信奉してきた向きからは——能力主義を正当化するのは無理であり信奉するのをやめた方がよいと説得されたとしても、それを捨て去りたくないと頑固に思い続ける向きからは——、依然としてこう反発してくるかもしれない。すなわち、第2節で述べたような、基本的な生活手段や生活機能上の幅を平等に分配するというのを、能力

主義に取って代わる正義の原理としたならば、“能力主義のもとでこそ果たされえた個人責任”が果たされなくなってしまうだろう、と。“個人責任のもとにあるゆえに努力し精進する”ことがなくなってしまう、ひとは概して怠け始めるにちがいない、と。これはしかし、考えてみれば、人-間の呼-応関係についての根本を押えることをしていない、まちがった言い分だ、ということに気づくことができると思われる。ひとはそれぞれよき生を求めて、だからこそ他者との呼びかけ-応じる関係とそこにもたらされるかもしれない信頼に賭けて、やっていくことになるのだから。そうしてやっていけるようになるためにこそ、能力主義原理下の競い合いを脱却しようとするのだから。

### 《結びに代えて》分かち合うこととわかりあうための呼-応をもつてのよき生の探り出し

本稿のここまでの考察をふまえて言えるのは、次のことだ。ひとそれぞれの誕生時における能力は相違する。誕生後、生育する過程における能力発達のありかたは、それぞれのひとの努力する意思などを以って制御できるわけでもない（ただし、制御できる部面が皆無だということでもない、と付け加えておいた方がよいだろう）。

ここで押えておくべきは次のことである。第一に、ひとそれぞれの来歴にはその当人の制御の効かない力がはたらいてきているのであって、そのひとの能力も当人にとって偶然的な来歴によって規定されてきているのであるから、そういう能力によって各人の（存在の）価値を測るわけにはいかないだろう。そんな来歴を捨て去ることもできないので背負いながら、それでも、というよりもそれだからこそ、よき生を（互いの間柄に賭けて）求めてゆこうとするところに、各人のかけがえなさが——取り替えのきかなさが——見出されてくるのだ、ということ。第二に、そもそもひとそれぞれの存在が第一次的に関係的存在なのだから、自己責任とか個体責任を基軸にして思考を展開することには無理が伴うはずである。だれかに呼びかけては応じられ（応じられそこない）、だれかの呼びかけに應じては（応じそこなっては）さらにまた呼びかけられることどもを、日々積み重ねてあるわれわれひとりひとりの生であるのだ、ということ。上記の第一・第二のことのゆえに、それぞれのひとのよき生を求めてゆくためにはかかわり合う人々の間で互いにわかりあおうと志向すること、そして分かち合おうと志向すること。そうしてしだいに形成されてくる信頼が必要不可欠なのだ、という結論に到るのではないだろうか。

### 註

- 1) たとえば荻谷剛彦〔2001〕の論旨から、このことが読み取られる。さらに、こうした論立てに対する批判的論及として拙稿〔西口2006：119-120〕を参照されたい。
- 2) 特にピエール・ブルデュー〔1990：170-204〕やブルデュー〔1988：194-235〕での議論展開を読み取り検討すれば、見て取れることだ。さらにブルデューの論立て全体の解釈の仕方としては、藤本一勇〔2001〕や山本哲士〔1994〕を参照することによって、ここに謂うブルデュー理解が認知され補強されるだろう。
- 3) 念のため付言しておこう。宗像はむしろ、教育営為を持ち上げ善き営みとして再生させようという意図のもとに、“人間の尊厳の確立としての教育”と言挙げしたのであった（宗像1974



特に272-274頁)。したがって、その言挙げが能力主義原理とどのように絡み合わされる可能性があるのか、という問題意識を持ち合わせていなかったであろう、と推察される。とはいえ、彼のいわば素朴な教育称揚の言い回しが、全体社会を仕切る秩序としての能力主義の浸透する中ではいかように機能することになるかは、考えておいてよいことだろう。

- 4) ここに謂う「現与の社会における価値基準・望ましき基準」には、私的所有という原則によって励起される活動性や能力を重要視するという、そのような価値基準・望ましき基準が、含まれる。
- 5) これらの点を指摘しつつ、竹内章郎のなした論点開示の内容を紹介したものとして、拙稿（西口2005：269-271）を参照されたい。

## 文 献

- ブルデュー, ピエール 1988 (石崎晴己訳) 『構造と実践』新評論
- ブルデュー, ピエール 1990 (加藤晴久編) 『ピエール・ブルデュー 超領域の人間学』藤原書店
- フォイエルバッハ, ルードヴィッヒ 1841→1937 (船山信一訳) 『キリスト教の本質』(上巻・下巻) 岩波書店
- 堀尾輝久 1963 「『教育と平等』をめぐる問題」(『思想』1963年4月号・8月号)
- 藤本一勇 2001 「ブルデューにおける相対的自立性の主体と抵抗の理論」(『現代思想』29巻2号)
- 荻谷剛彦 2001 『階層化日本と教育危機』有信堂
- 宗像誠也 1974 『宗像誠也著作集 第一巻』青木書店
- 西口正文 2005 「教育的理性と反省性」(『教育の臨界』情説出版)
- 西口正文 2006 「不平等再生産と教育をめぐる問題構制」(椋山女学園大学『人間関係学研究』第四号)
- 大澤真幸 2002 『文明の内なる衝突』日本放送出版協会
- ジュディス・シュクラー 2001 (大川正彦訳) 「恐怖のリベラリズム」『現代思想』第29巻7号
- 竹内章郎 1986 「能力と平等をめぐる一視角」(藤田勇編『権威の秩序と国家』東京大学出版会)
- 竹内章郎 1993 『弱者の哲学』大月書店
- 立岩真也 1994 「能力主義とどうつきあうか」『解放社会学研究』第8号
- 立岩真也 2004 「社会的分配の理由」(齋藤純一編著『福祉国家／社会的連帯の理由』ミネルヴァ書房)
- 山本哲士 1994 『ピエール・ブルデューの世界』三交社